

# 随筆

## ニュージーランド・ホリダイ(その4)

竹原 宏

ニュージーランドの酪農は20センチの酪農技術であり、我国の酪農は40センチの酪農技術である。そして将来は、30センチの酪農技術を確立しなければならない。

### 4、20センチの酪農

ニュージーランドは、畜産の国である。ニュージーランドの酪農は、世界で最も労働生産性が高いといわれている。即ち、乳牛の省力管理では最も進歩した国といわれている。

ニュージーランドには牛舎がない。1年中牛は放牧されている。農家は、1日2回搾乳をするだけで、牛の管理作業は外に何にもない。我国のように敷わらを交換したり、草を刈って来たり、牛を牽いて運動させるような面倒な作業は一斉省略されている。青草は放牧であるから自分で好きなだけ食べており、冬の乾草やエンシレージも自動給与であるから粗飼料が不足するような事はない。濃厚飼料は搾乳牛だけ搾乳の時に与える。育成牛などには殆んど与えていない。種付けは自然交尾で、大抵の農家に1、2頭の種雄牛を持っている。そして種付けシーズンに一斉に種付けがされ、春先に子牛が続々と生れる。この子牛は離乳と同時に若草の中に放牧され、草の成長と共に大きくなるので、栄養の需給は自然に、しかもまことにタイミングよろしく自動調節されるのである。家畜を自然に帰して、いや、自然を巧みに利用して家畜を飼っているのである。

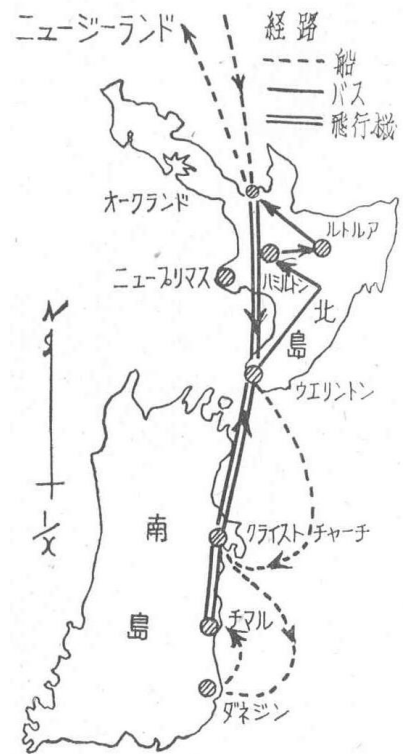
だから、我国の酪農のように、繁殖障害に悩んだり、ケトージスや低酸度二等乳のような難しい病気は殆んどないのである。そのため、農家はむずかしい種付理論も家畜生理も知らないで立派に経営ができるのである。農家の努力はむしろ草の管理に向けられている。あちらで、「この農場に何トンくらい草ができますか」と質問すると「解らない」と答える。

その代りに、この圃場から何ポンドのバターがとれると答える。私達にはピンと来ない回答であるが、考えてみると、まことに当を得た表現である。家畜と土地が密接に繋がっている事を示すものである。

我国の酪農技術は、草の生産管理にあまり重点をおかないで、乳牛の飼料給与や個体管理に神経をすり減らしており、1頭の乳牛を飼うために年間700時間を費やしたり、牛舎施設に莫大な経費を投入して、経営に四苦八苦しているのである。両者を比較すると全く天と地ほどの差がある。どちらも同じ酪農であり乍ら、その内容は全く異質なものである。

この両者の分岐点は、放牧型式 (Farmstead Feeding) と刈取型式 (Green chop Feeding) の違いであろう。彼等は放牧に適する草の長さを8~20センチという。あまり短い時に放牧すると、草の生長を阻み収量が減少し、20センチより長くすると、蹄傷によるロスが大きくなり利用効率が減る。そこで、この放牧型式によるニュージーランドのような酪農技術を20センチの酪農と呼んだのである。我国のように狭い圃場で必要量を確保するためには、どうしても反当収量を増さねばならない。そのために、採草の場合にも、飼料作物の場合にも、40センチ以上の草を利用することになる。そこで、この方式を40センチの酪農と称したのである。

ニュージーランドの面積は、丁度、我国の北海道



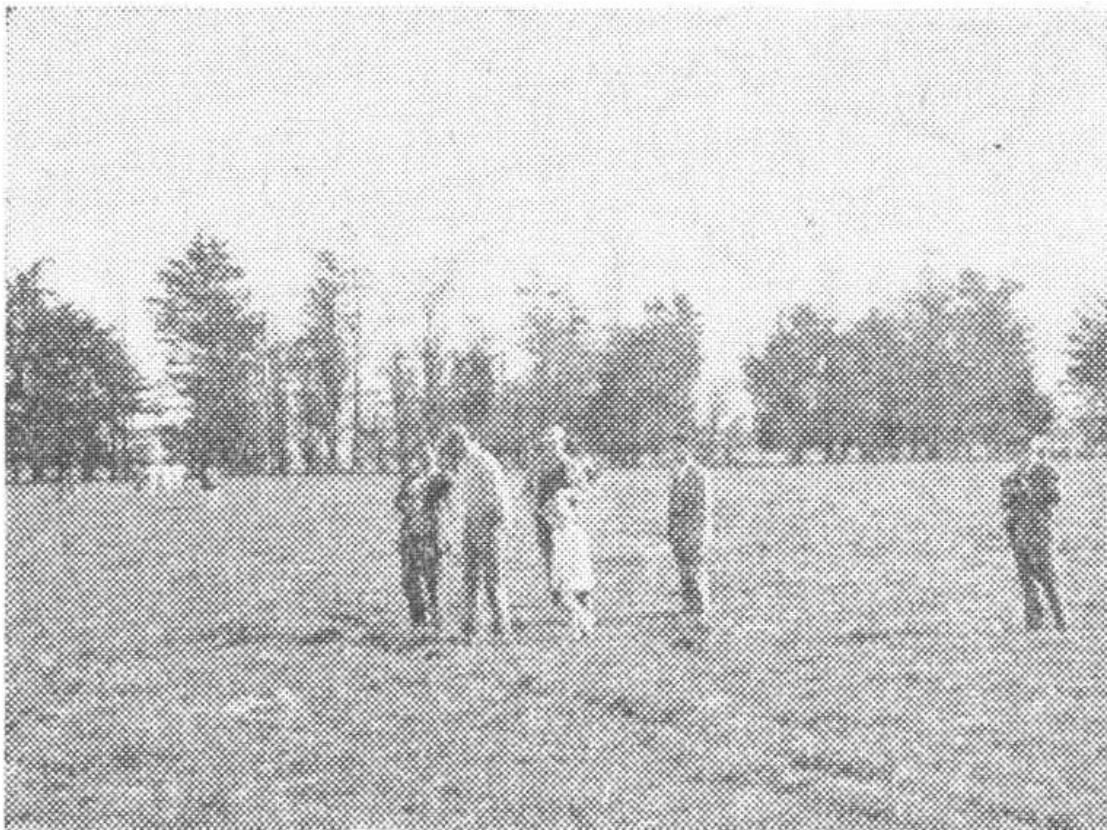
## 岡山畜産便り 1965.04・05

を除いたくらいの面積であるといわれる。この面積に250万人（大阪市の人口に足りないくらい）の人しか住んでいないのであるから、農家の土地利用もまことに贅沢なものである。酪農家は、100ヘクタールくらいの草地を持って100～200頭くらいの乳牛を飼っている。どの農場も10ヘクタール毎に仕切ってパドックを作っている。このパドックの仕切りに用いているのがゴース（Gose）という灌木である。カラタチに似たトゲのある硬い木で、高さ1メートル20センチ、巾40センチくらいの生垣であり、小さな黄色の花が一面についていた。私達が訪れたのは、9月であったからあちらの春先であった。牧草は10センチくらいに伸び、このパドックに10～20頭の牛が放牧されていた。目にしみるような緑色と黄色の斑のパスチャー（草原）が遙か彼方まで拡がり、そのはてに氷河を被った南アルプスの連峰が陽光に輝く様は、オセアニアの楽園の名に相応しい眺めであった。

我国の酪農も将来規模が拡大され、10頭なり20頭なりの乳牛を飼う場合には、従来やって来たよう

な集約的な経営では、入手が足りなくなってくるであろう。しかし、ニュージーランドのように1頭当たり0.8～1.0ヘクタールの草地を当てる事もできないであろう。とすると、集約的な技術と省力的な技術の混合したものが必要となってくる。即ち20センチと40センチの中間的ないわゆる30センチの酪農技術が必要であろう。

例えば、永年牧草地に飼料作物（ナタネ、イタリアン）を導入し、早春の収量を増加して、放牧期間の延長を図ったり、レンガ、イタリアンにストリップ放牧を行い、刈取作業を省略したり、トレンチサイロやバンガーサイロの制限自動給与の方法を考えたり、解放牧舎、追込牛舎の施設改善により、群飼いによる悪弊を取除いたり、等々、20センチと40センチの長所だけを集めて日本独特の30センチの酪農技術を組立てなければならない。そして、これは急がなければならない。



ニュージーランドの放牧区